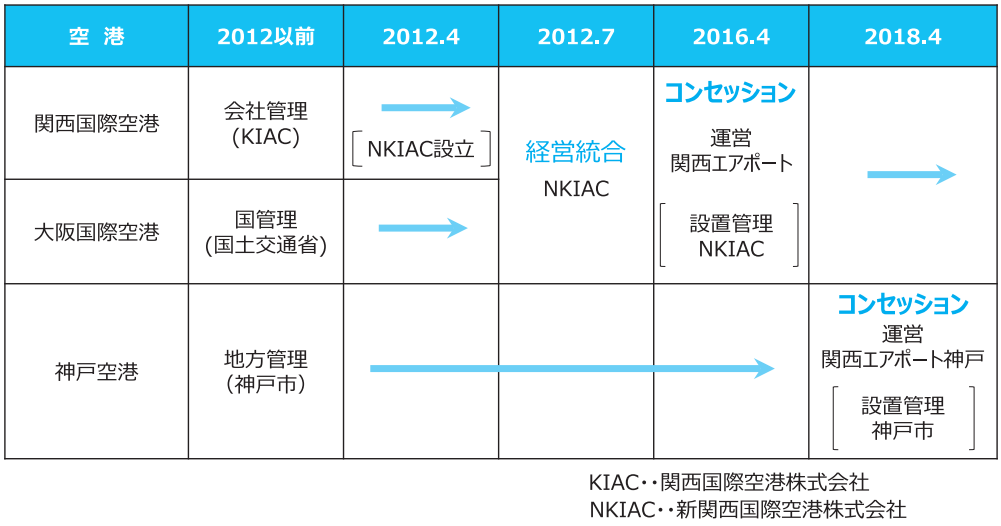
関西3空港のコンセッション事例

関西エアポート株式会社 企画・管理部 広報・ブランディングチーム

1. 日本初の複数空港運営

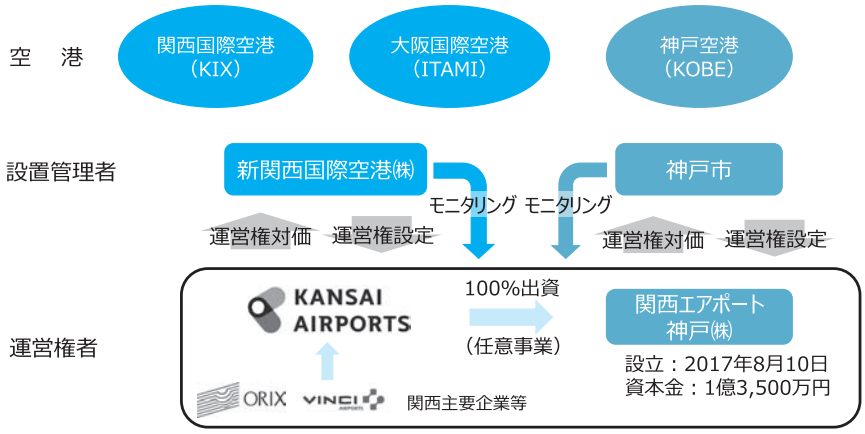
関西エアポート（株）は，オリックス（株）とVINCI Airportsを中核とするコンソーシアム（オリックス（株）40%，ヴァンシ・エアポート40%，その他の出資者20%）により設立され，関西国際空港および大阪国際空港の運営を新関西国際空港（株）から引き継ぎ，2016年4月1日より両空港の運営会社として事業を開始している。これは，日本において同一会社が複数の空港を運営する初の事例となる。また，2018年4月1日からは関西エアポート（株）の100%出資会社である関西エアポート神戸（株）が，神戸空港の運営を神戸市から引き継ぎ，関西エアポートグループによる関西3空港の運営がスタートした。

関西エアポート（株）の主要出資者である，グローバルに幅広い事業を行うオリックス（株）と，36空港の運営を行う世界有数の空港運営事業者であるヴァンシ・エアポートにより，関西エアポートグループは，安全とセキュリティを常に最優先しつつ，民間ならではのノウハウを活かした適切な投資と効率的な運営によって国内外からの空港利用者へのサービスを強化し，関西3空港の可能性を最大限に引き出し，地域コミュニティへ貢献することを目標としている（図－1，2）。



KIAC‥関西国際空港株式会社
NKIAC‥新関西国際空港株式会社

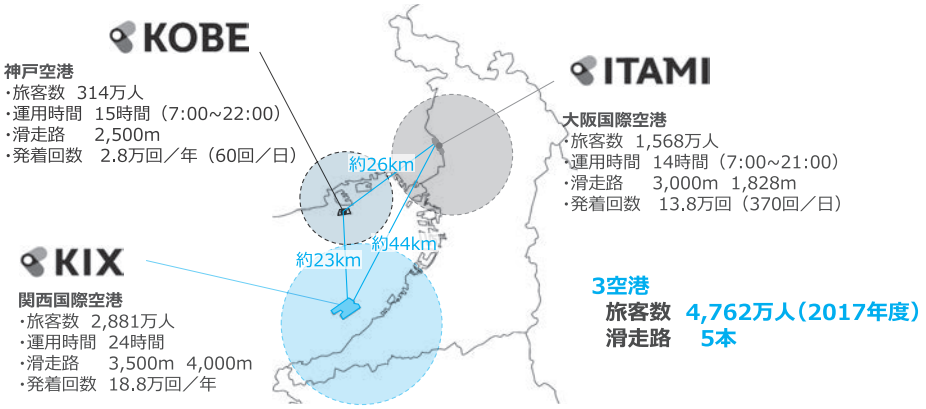
図－1 コンセッションまでの経緯（概略）



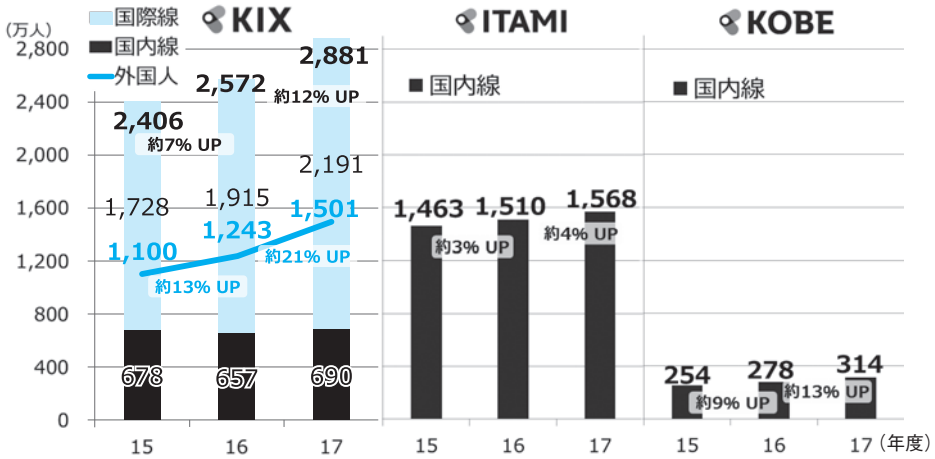
図－2　3空港運営体制

2.　3空港の利用状況（図－3～6）

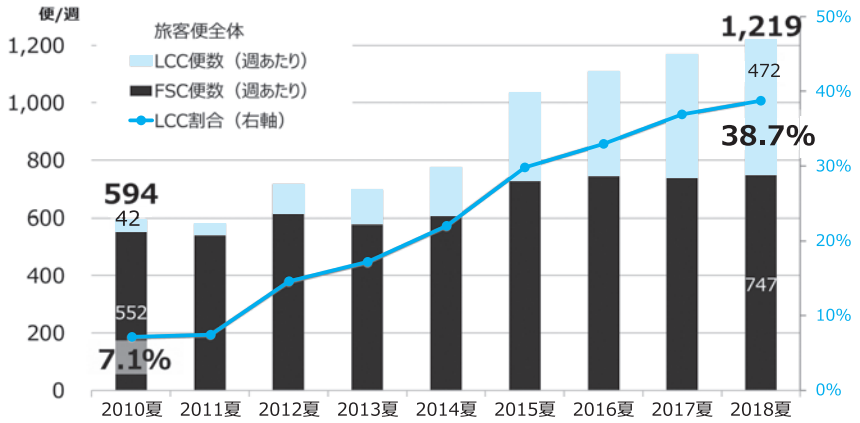
関西国際空港では，旺盛なインバウンド需要を背景に旅客数は引き続き好調に推移しており，国際線外国人旅客を中心として近年高い伸びを示している。関西国際空港では，日本で初めて本格的なLCC専用ターミナルを建設（2012年10月）するなど早期からLCCの誘致に力を入れており，Peach Aviationによる国内拠点化，首都圏よりもアジア圏から約1時間近い立地等もあり，



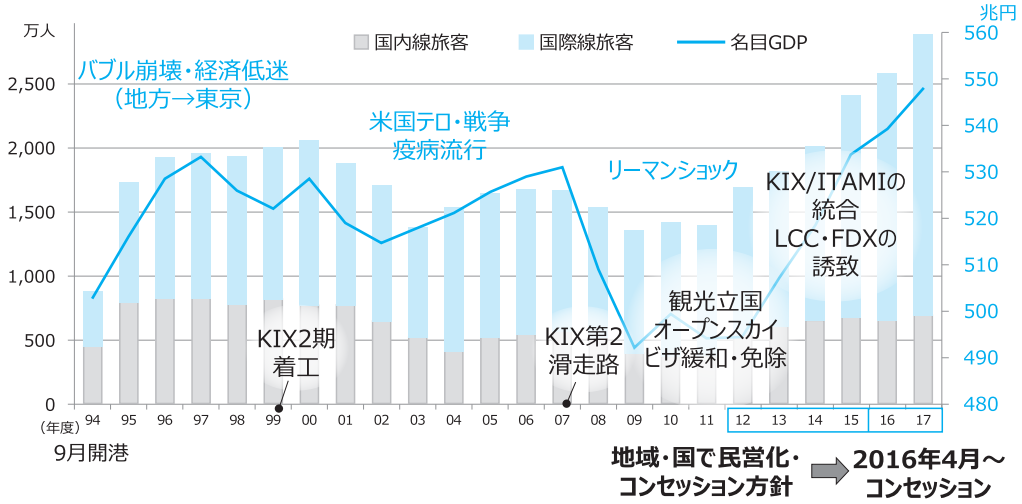
図－3　関西エアポートグループが運営する空港の紹介



図－4　旅客数推移



図－5　関西国際空港　国際線旅客便の推移（夏スケジュール）～FSC・LCC 構成～



図－6　関西国際空港の開港からコンセッションに至るまで（出典：国民経済計算　内閣府 HP）

2017 年国際線夏スケジュールにおける LCC の比率は 38.7% となった（国内線における LCC 比率は 54%）。

なお，大阪国際空港，神戸空港については発着回数の上限があり，両空港ともほぼ上限に達しているが，機材の大型化や搭乗率の向上等によりいずれも 2017 年度は前年度を上回った（大阪国際空港：対前年 104%，神戸空港：対前年 113%）。

※神戸空港は，2017 年 7 月の仙台線就航により発着回数が上限である 60 回 / 日に達した。

3.　民営化後の取り組み ～「新しい旅の体験」を提供～

関西エアポートでは，空港の航空ネットワークの拡大はもちろん，お客様に「新しい旅の体験」を提供するため，「楽しさ・ワクワク感の創出」と「快適で便利・ストレスを減らす」ことにも力を入れている。オリックス，ヴァンシ・エアポートがもつさまざまなノウハウと民間ならではのスピード感をもって，各種取り組みを行っている。

(1)　航空系の取り組み

関西国際空港において競争力の強化，空港施設運用の最適化，中長距離路線や新規地点への就航に対するインセンティブの強化のため，着陸料などの新料金制度を 2017 年 4 月以降順次導入した。また，国際航空輸送の拡大，高付加価値貨物強化への取り組みとして，世界水準の医療品航空輸送品質認証スキーム「IATA CEIV Pharma」の認証取得を関連する事業者と連携して進めている。

(2) ワクワク感の創出

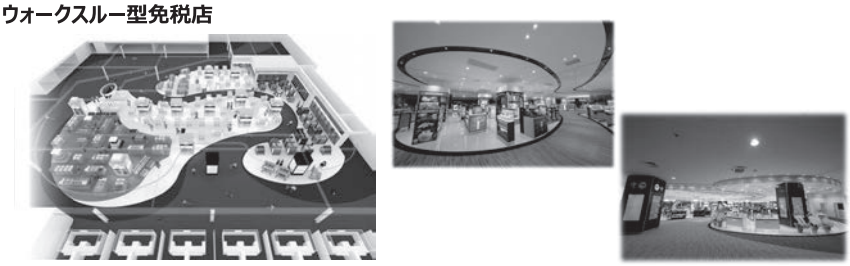
関西国際空港第2ターミナルビル（国際線）に，保安検査場から各ゲートまで免税店などの商業施設の間を通りながら進む構造の「ウォークスルー型商業施設」を，日本の空港で初めて設置した。利用客に搭乗までの待ち時間を楽しんでもらうとともに売り上げの向上にも寄与している。また，利用客の利便性向上・レジの待ち時間短縮のため，国内空港で初めて「アリペイ」を導入するなど，空港内店舗での支払い方法の多様化にも空港会社として取り組んできた（図－7）。

大阪国際空港では，新関西国際空港（株）の計画を引き継ぎ，約50年ぶりとなるターミナルビルの大改修を行っている。2018年4月には先行オープンとして，展望デッキの全面リニューアルや34のレストラン・ショップを新規オープンさせた。空港利用者だけでなく，地域住民や家族連れにも楽しめる施設やショップを誘致することで，地域のお出かけスポットとしての位置付けも強くなっている。グランドオープンは2020年を予定している（図－8）。

(3) 「ファストトラベル」の取り組み

空港利用者の増加に伴い，現在力を入れているのが，「ファストトラベル」(IATA〔国際航空運送協会〕やACI〔国際空港評議会〕が提唱する，空港での利用者の手続きをよりスムーズにすることで効率的なサービスの提供を目指す取り組み）である。空港到着時から航空機に搭乗するまでストレスなくスムーズに移動いただけるよう，各種取り組みを行っている。関西国際空港では，自動チェックイン機やスマートレーン（同時に複数が利用できる保安検査機器）の導入，PFM（旅客動線管理システム）を利用して各出発口の混雑具合を表示しているほか，2018年2月には自走式セルフチェックインロボットや最新型清掃ロボッ

ウォークスルー型免税店



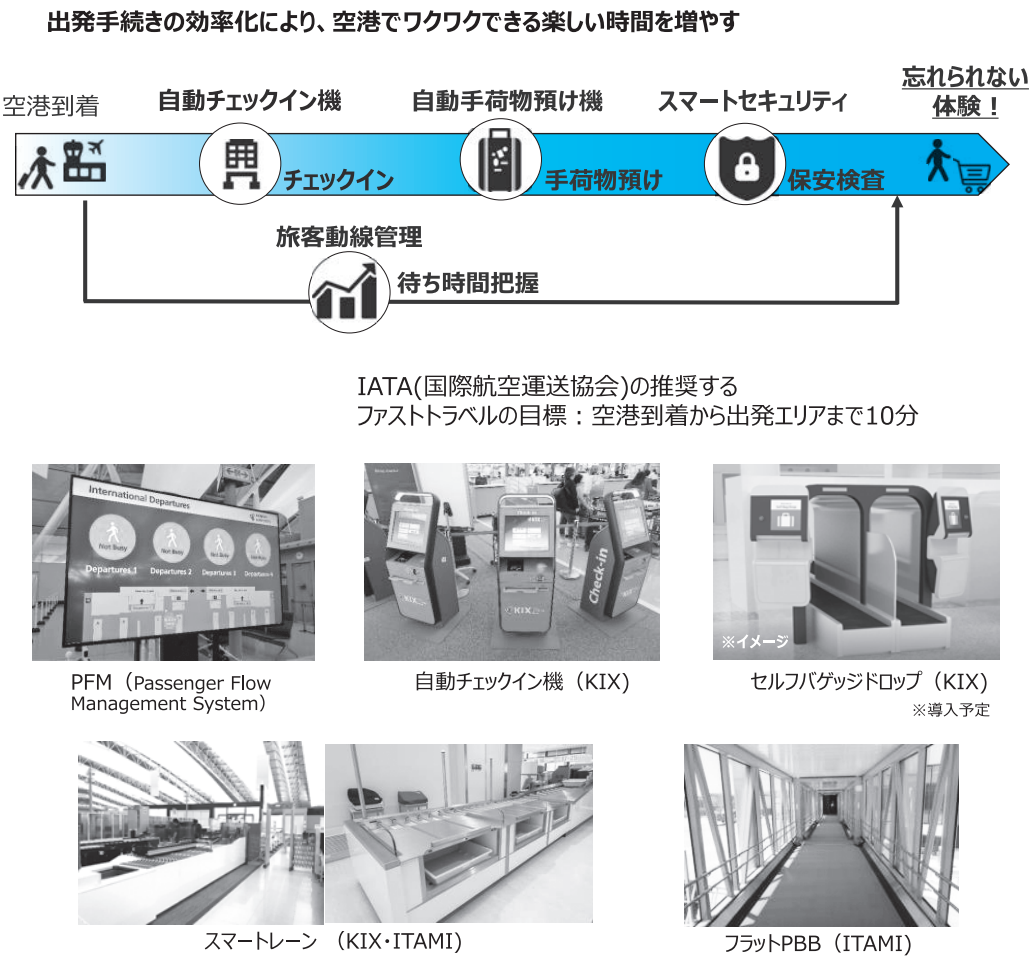
お支払い方法の多様化

・『アリペイ（支付宝™ ALIPAY）』導入（2016年）
・『Visa payWave』『Mastercard® コンタクトレス』導入（2017年）

図－7　空港でのお買い物やお食事をより便利に

・2020年のグランドオープンに先駆け、中央及び屋上エリアを 2018年4月18日に先行オープン
・非航空施設の全面改装
・家族で楽しめるイベントエリアなどを設置
・南北に分かれていた到着口を中央の1箇所に集約
モノレールやバスなどへのスムーズなアクセスを可能に

図－8　大阪国際空港ターミナルリニューアル



図－9　ファストトラベルの取り組み

トの実証実験も行った。最新の機器や IT を活用して「ファストトラベル」の実現を目指している（図－9）。

4.　関西 3 空港で「1 つの空港システムの構築」を目指す

2018 年からの 5 年間に，関西 3 空港で総額 1,000 億円の投資を計画している。空港の基本である安全安心のために必要な投資に加え，前述の「ファストトラベル」の推進にも引き続き取り組んでいく。関西エアポートグループでは，拡大する関西の航空需要に対応するため，関西 3 空港で「1 つの空港システムの構築」を目指している。好調なインバウンド需要に加え，「ラグビーワールドカップ 2019」，「2020 年オリンピック・パラリンピック」，「ワールドマスターズゲームズ 2021 関西」等の一連のスポーツイベントや，招致中の 2025 年大阪万博，日本初開催の「2019 年 G20 サミット大阪」など，今後関西では多くの国際イベント・会議が控えている。地域と密に連携しながら，玄関口である空港がボトルネックとならないよう，空港キャパシティの確保とスムーズな空港運営を通して関西・日本経済の発展に寄与することが空港としての責務と考えている。